

辻井伸行さん  
全盲のピアニスト「生後8か月の発見」で天才を  
育てた母の「絶望と歓喜」

授賞式でわが子の名前が呼ばれた瞬間、両親の喜びはいかばかりだったろう。

生まれつき全盲の辻井伸行さん（20）が、米テキサス州で行なわれた「第13回バン・クライバーン国際ピアノコンクール」で見事優勝。ハンディを乗り越えての日本人初の快挙に、世界中が沸いた。

母のいっ子さん（49）が、伸行さんの才能に気づいたのは、生後8か月のことだった。

産婦人科医である父の孝さん（52）が本誌の取材にこう振り返る。

「（ロシアの著名ピアニスト）ブーニンが演奏するショパンの『英雄ポロネーズ』のCDを聴くと、音楽に合わせて手足をバタバタさせることに、妻が気づいたので。そのCDが傷ついたため、違うピアノリストが弾く同じ曲のCDを買ってきたら、なぜか機嫌が悪い。それでもう一度、ブーニンを

買ってきて聴かせたら、また嬉しそうにバタバタとリズムをとる。この子はピアノの違いを聴き分けているんだ、そう思いました」

そして2歳3か月のある日、伸行さんは、いっ子さんが口ずさむ『ジングルベル』に合わせ、突然、買いたばかりのおもちゃのピアノを弾きだしたという。再び、孝さん。

「まだ指1本での演奏でしたが、私が病院から帰ると、妻が大興奮していました。伸行は発達が遅く、その頃は歩くことも、言葉を発することもできませんでしたが、いきなりピアノを弾いたのには私も驚きました」

伸行さんが生まれつき眼球が発達しない障害を持っていると知った時、いっ子さんは絶望の淵に立たされた。クリスマス時期、街中で美しく飾られたツリーを見ては「この子は一生、この美しさを見ることのできなないんだ」と、涙が止ま

らなくなつたという。

だが、音楽という、希望の光に出会い、いっ子さんは「生まれてきてよかったと思えるような人生を、この子が歩んでいかれますように」と願うように――。

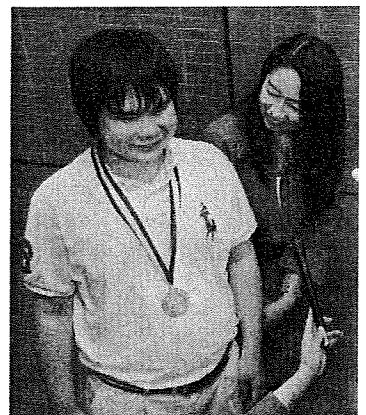
4歳から本格的にピアノを習わせた。美術館にも積極的に連れていき、絵の説明を詳しく聴かせた。見えなくても、心で感じとって

ほしかったからだ。こうして常に母に寄り添われながら、伸行さんは持てる才能を伸ばしていったのである。

伸行さんは現在、上野学園大学に在学中。恩師の横山幸雄教授はこう語る。

「目が見えるピアニストには想像できないような努力をしてきた。まったく光のない世界で、我々にははかり知れないような恐怖や不安を抱きながら、学び続けてきたことでしょう」

受賞の際、「目が見えた



ら一番見たいものは？」と問われ、「お母さんの顔を、一度でいいから見てみたい」と語った伸行さん。次はここまで育ててくれた両親に『歓喜のカータービル』で恩返しする番。さらなる飛躍を期待したい。

報道陣で成田空港へ、受賞後、成田空港で報道陣の質問に答える辻井伸行さん（右は母、いっ子さん）